

生田祭の社会学的研究 (2)
——三宮地区の地域特性と祭りの実践方法——

小 松 秀 雄

Summary

Sociological Study on Ikuta Festival (2) —Regional characteristic of Sannomiya district and method of practicing festival—

Hideo Komatsu

The service district on duty (housitouban) of Ikuta Festival of 1994 term is Sannomiya district (1,2, and 3 chome in Sannomiya-cho and 5 and 6 chome in Kanou-cho). The biggest shopping street in Kobe that is called the central street (Sentagai) is in the district and a lot of people come and go everyday. The central street (Sentagai) changed into the shopping street which was lined with modern buildings by the township remodeling business in the Showa 40s. Therefore, the shop of the dwelling using was almost lost, the inhabitant decreased to about two hundred people, and a lot of neighborhood associations (chonaikai or jichikai) replaced the promotion union (sinkoukumiai) and the cooperative society (kyoudoukumiai).

Though the promotion union (sinkoukumiai) and the cooperative society (kyoudoukumiai) are doing various activities, it is another organization which is called a festival committee office (saireiinkai). The director of the union is called by Ikuta Shrine and the festival committee offices are chosen. In that case, the personal network formed through a usual activity of the promotion union (sinkoukumiai) and the cooperative society (kyoudoukumiai) plays an important role. Because peoples bonds in the shopping street are strengthened through the practice of the festival, Ikuta Festival gives the influence of the plus to a personal network with the promotion union. In this paper, I make clear how Sannomiya district managed Ikuta Festival, through analyzing the history, local community in Sannomiya district and the festival committee offices.

1. 問題の所在

前号（第41巻第2号）では、生田神社の法人組織と生田祭の輪番制を概観し、平成5年度の奉仕当番岡方地区の祭りの実践方法を記述してみた。今回は平成6年度の当番三宮地区を取り上げ、地域特性と祭りの実践方法を考察する予定にしていた。原稿を仕上げる直前、平成7年1月17日早朝に神戸は直下型の大地震に襲われ、三宮を中心とする市街地域の大半が壊滅的被害を受けた。生田神社とその氏子区域は最も深刻な被害を受けた地域に入っており、神社の建物だけでなく商店街のビルや住民の家屋の多くが程度の差こそあれ損壊した。地震の後、生田神社と氏子区域を回ってみたが、氏子住民の仕事や生活の場となっている商店街がかなりの打撃を被っている。例えば神戸一の繁華街である三宮センター街では3月になっても依然として通常の営業を再開できない店も多く、平成6年に生田祭を実践した時のような賑わいのある街に戻るまでには時間がかかりそうである。神戸市が提示している復興計画を踏まえながら、生田神社と三宮地区の商店街は独自の意志と努力により地域の再興を進めていくものと思う。幸いにも加藤隆久宮司はいろいろな場で、第二次世界大戦の打撃から立ち直った神社と街の歴史を思い起こしながら、復興へ向けての力強い意志を表明している。商店街の人々も同じ思いを持っているようである。

今回取り上げる三宮地区は、終戦直後のがれきの中から神戸一の繁華街を築き上げた商店主が集まっている街であり、経済から祭礼に及ぶ様々な独自の組織とネットワークを含む実践方法を蓄えている。神戸の復興に対する期待を込めて、本稿では三宮地区の地域特性と生田祭の実践方法を社会学の立場から検討してみたい。

本論に入る前に、本稿の最も重要な二つのキーワードをごく簡単に説明しておきたい。まず第一に、マルクスの社会理論とマルクス主義では実践という言葉は革命のために行動するという意味を込めて使われるが、本稿ではエスノメソドロジーやピエール・ブルデューの社会学において使用されている実践という言葉を念頭に置いて使うことにする。すなわち、革命のための行動という意味に限定せずに、種々様々な職業や地位の人々がそれぞれ生活の場で営む衣食住・儀礼・芸術・学問のための活動全体を指し示す言葉として使う。また、実践方法という場合には階級や身分を含め特定の集団と社会における様々な実践の基礎となる部分を指し示しており、生活者の活動の指針となるような側面に対応する。それは、観察できるが当事者には必ずしも自覚されているとは限らない。生活の実践を通じて秩序＝権力が知らず知らずの間に構成（再生産）されるという視点が重要なポイントになるが、三宮地区の祭りの実践に関してはリーダーたちの祝祭、あるいはリーダーシップの象徴化の過程であり、それを通じて商店街社会が再生産されると見なすこともできる。ただし、「当事者たちの言語表現や身体活動を焦点にして差別と排除の戦略＝体制を解明する」という問題、あるいはコミュニティ権力構造と都市

政治の問題を論点にすることは紙幅の都合上できない。さらに、調査者＝観察者の視点と当事者＝民衆の視点の関連も重要な方法論上の問題となるけれども、とりあえず本稿では調査者の学問的实践として「当事者の視点から当事者の実践と実践方法を再構成する試みをする」ということにして、方法論の議論は差し控えたい。構造主義的客観主義に徹すれば観察者の視点から深層の構造を分析することが作業の目標となり、当事者の視点は余り論点とはならないけれども、本稿では当事者にとっての実践のあり方を焦点にする。

第二に、ネットワークという言葉は複数の単位（ここでは特に個人ないしは集団）のつながり、結合、交換、関係などの意味で使う。ただし、ネットワークの概念と方法の議論は省略し、別の機会にエスノメソドロジーやブルデューの社会学を含めネットワーク論を再考したい。ここでは参考のために J.C. ミッチェルの警告を取り上げると、厳密に分析的用法で使うためにはネットワークの形態学的基準（固定点・到達可能性・密度・連なり）と相互作用の基準（内容・方向性・持続性・強度・頻度）の一つ一つについて調べなければならない。質問紙による調査データの統計学的解析と参加観察によるデータの解釈を通過しなければ、ネットワークの厳密な分析はできない。本稿ではそのような壮大な分析を目指しているわけではなく、ネットワーク論の知見を手がかりにして当事者の実践方法を再構成する作業に限定する。ただし、比喩的用法よりもさらに一步踏み込んで、分析的用法を絶えず考慮しながら実践方法の特質を解明するためにネットワーク論を使う。現代の大都市では地域社会であろうとも、集団とか組織の視点だけでは人々の実践を解明することは困難であり、集団や組織を横断する人々のつながりが実践の重要な鍵を握ることを心得ておかなければならない。ここで予め断っておきたいが、筆者が依拠しようとするネットワーク論は、数学と人類学の視点を中心とするものではなく、むしろ社会学的相互作用論の偉大な創始者ゲオルグ・ジンメル（Georg Simmel）の視点を取り入れたものであり、「大小様々な集団の交差」と「相互作用と集団の交点としての個人」という発想を基礎とする。現代社会と文化に関する深い社会学的洞察を備えたジンメル（Georg Simmel）の相互作用論を基礎としたネットワーク論でなければ、大都市の錯綜した「集団の交差」と「個人のネットワーク」を見通すことは難しいように思われる。

2. 三宮地区の地域特性

周知のように、現在の150万都市神戸の中央ビジネス地区、または中心的業務地帯（central business district, いわゆる C.B.D.）は複数の主要な鉄道が交差する三宮駅周辺であるけれども、昭和初期までの C.B.D. は新開地から神戸駅にかけての地域であった。さらに歴史を遡ると兵庫津（生田神社の氏子区域としては岡方と呼ばれる地域）が神戸一円の中心地として栄えていた。都市の C.B.D. は時代とともに変わる可能性が高いが、なぜ変わるのか、あるいは特定の地域が C.B.D. になるのかは経済地理学の立地論の研究テーマであるから、ここでは問わないことにしよう。

神戸に関しては、この六十年余りの間は三宮地域が中心的業務地帯になっていて、阪神大震

災により壊滅的打撃を被ったとは言え、震災後も中心性はしばらくは変わらないのではなかろうか。過去の歴史を振り返ると三宮地域がC.B.D.になってから約十年後、第二次世界大戦の際の空襲により焼け野原になったけれども、戦後は見事に復興し以前にも増して中心性は強くなったように推測される。ここでは三宮地区の戦後の歴史を辿りながら、固有の社会的地域特性を探り出していこう。

(1) 三宮地区の戦後史

生田祭の輪番制を構成するメンバーとなっている三宮地区とは、前号で示した通り三宮町1～3丁目と加納町5～6丁目であり、昭和40年代から人口が激減している。すなわち、かつては5000人前後もあった人口が現在では200人程に落ち込み、住民のいない業務地帯（ビジネス地区）に変わってしまった。住民の自治会ないしは町内会もめっきり減ってしまい、その代わりに振興組合や協同組合のような「住民ではない商店主の各種の団体」が地域社会を管理＝運営するようになった。なぜ、どのような経過により三宮地区は住民のいない業務地帯に変化したのだろうか。

センター街の『二十年史』や『三十年史』、さらに振興組合などのパンフレットや報告書を見ると、三宮地区の商店街を発展させた人々の顔が写真と経歴などによって紹介されていると同時に、街の変化の様子も写真と年表、さらに様々なエピソードを使って説明されている。それによると、焼け野原となった三宮地域で昭和21年に、町内会と商工会を兼ねた任意団体である1丁目商店会（1丁目会）が結成された。この時、住民の発案に基づいて三宮センター街という名称が生まれ、現在のセンター街への歩みが始まった。最初の1丁目会には、恐らく戦前から当地で商売を営んでいた住民がかなり含まれており、戦前の町内会や商工会の経験を踏まえながらも民主主義の新しい理念に則って商店会が結成されたものと想像できる。戦前の当該地域社会の組織構成や地域特性を取り上げることはできないけれども、いろいろな場面で多様な形で連続＝伝承と断絶＝変革を繰り返しながら戦後の地域社会の構成が進められたのではなかろうか。その後、三宮地区の商店街は平和な社会の下で順調に発展し、多数の商店会が結成されるようになった。昭和53年に発行されたセンター街連合会の『三十年史』では、昭和21年から30年までが「センター街創立より確立時代」、昭和31年から40年までが「センター街成長発展の時代」、そして昭和41～52年までが「センター街近代化時代」という位置づけが与えられている。昭和53年以降は『三十年史』の対象外になっているが、大阪の都心梅田の吸引力に脅かされながらも、近代化路線に乗ってさらに集客力を強めていった時代である。したがって、現在の三宮地域の問題を考える際に重要な転機となるのが「センター街近代化時代」であろう。

地元の商店街の人々が昭和40年代を近代化時代と自己認識している点からも推測できるように、昭和40年代の前半までは外見上は概ね職住隣接の低層の家屋が並ぶ、戦前に類似した木造の商店街が築き上げられてきたと言えよう。すなわち、地域社会の面では戦後民主主義に基づいて任意団体である商店会が結成されたとは言え、商店街の建物や施設の面では戦前の量的拡大という形態になっていた。ところが、40年代に入ると神戸市が打ち出した現代都市化政策によって三宮地区の様子はがらりと変わってしまう。神戸市は、伸び悩む重化学工業＝港湾都市

から高度産業＝情報都市への脱皮を目指し、人工島建設などの都市政策を次々と展開するようになるが、三宮地区の改造事業もその一環として進められた。センター街の『三十年史』や三宮第一協同組合の『十年誌』『十五年誌』などに市街地改造事業の経過が詳しく記述されているが、戦前と余り変わらないように見える住居兼用の低層の商店街を、一挙に近代的な高層ビルを中心とする商店街に改造する大規模な事業である。高層ビル化と不燃化という改造計画をめぐって神戸市当局と地元商店街の間で対立があったけれども、何回かの交渉を経て最終的には市当局の方針に近いプランを基本にして事業が実行された。狭い土地の高度利用を狙った、いかにも神戸らしい都市政策であるが、この度の阪神大震災がもたらした壊滅的被害のために、40年代からの神戸の開発＝再開発方式は批判にさらされている。ほとんどの批判が「コストの最小化と利益の最大化を追い求め、防災を怠った都市政策だ」という主旨になるが、少なくとも三宮地区の改造事業は防災建築街区計画として実施されたものであり、三十年前のレベルではそれなりの耐震構造の街づくりを目指していたのではなかろうか。昭和60年に刊行された三宮第一協同組合の『十五年誌』において当時の神戸市助役笹山幸俊氏（現神戸市長）と組合理事長入江清一氏は、三宮商店街を防災建築街区に改造した足跡を回顧しながら祝辞を述べている。彼らは当時のレベルで防災建築街を構想し、努力してきた。他の木造の商店街が全滅に近い打撃を受けたのに比べ、三宮地区の近代的商店街は建物が全壊するところまでは至らず、防災建築街という点では何とか面目を保ったと言えよう。ただ、不幸にして震度7の直下型の大地震に耐えられる防災都市を構想し建設することはできなかった。災害が起きてから批判することはたやすいことである。自然の巨大な威力を前にした時、人間の都市づくりはいつも後手に回るような気がしてならない。

話が逸脱するので三宮地区の変動の問題に戻るが、神戸市の高度産業化政策に呼応する形で昭和40年代から50年代前半まで約十年余りに渡り三宮地区の市街地改造事業が実行された。サンプラザビルとセンタープラザビルを中心とする近代的な商店街が出来上がり、その後神戸の都心として中心性がよりいっそう強くなっていく。住居混合のビルも計画されていたけれども、結局業務用ビルに一本化されたために商業地域として純化されることになった。ほとんどの住民が住居を地区外に移し、仕事だけをする地域となった。住民の流出は大都市のC.B.D.の宿命であるが、三宮地区に関しては神戸を代表する商業地域として繁栄していると同時に、かつての住民である店主たちによって地域社会としても立派に維持・運営されている。『三宮センター街三十年史』等の資料を見ると、戦後は絶えず住民＝店主たちが相互に連携を取り合いながら地元の発展に努力してきたことが読み取れる。そのような絶えざる実践は、当地区の人々の社会的能力を高め、多種多様な団体、ネットワーク、イベント、行事を生み出したと考えられる。したがって、今のところ地域の経済力、社会力、文化力全体が衰えていくようなインナー・シティ問題は現れていない。

(2) 三宮地区の地域団体の組織構成と実践

上述した高層ビル化と不燃化に基づく市街地改造事業は、三宮地区の団体と地域社会にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

一般に住民がいて、生活の防衛＝擁護と改善などのために何らかの関係や組織が作られる時には、そこに地域社会が生まれる。もし個々の家族（あるいは個人）＝住民が同じ場所で何のつながりもなく、ばらばらに生活しているような場合には、地域社会は存立していない。現代の大都市では後者に近い状況が現れているけれども、日本ではかろうじて行政主導の自治会＝町内会が地域社会の空白を埋めている。それに対して、仕事場に住居を持たない商店や企業であっても、「同じ場所で仕事を営んでいるという利害関心」に基づいて仕事と地域生活の防衛と改善のために地域的連帯を作るとすれば、事業所をメンバーとする地域社会なるものが生まれる。そのように、地域の経済地理的状况に応じていろいろな関係や集団が存立する可能性があると言えよう。三宮地区の場合も、市街地の近代化以前と以後とでは存立する関係や団体にかなりの違いが現れている。

昭和40年代前半までは住居兼用のお店が多かったために、住民の町内会＝自治会と商店の組合を兼ねた商店会が実質的に存立し、活動していた。住居混合のビルが建設できないことが決まると、住居を外に移す商店主が急増して住民の町内会＝自治会は存立し得なくなってしまう。実際に、昭和46年になるとセンター街1丁目会はなく、商店街振興組合法に基づいて1丁目振興組合が創設された。1丁目会に続いて2丁目会と3丁目会も、それぞれ昭和48年に2丁目振興組合、50年に3丁目振興組合に組織替えするようになる。ここで、三宮の地域社会の変化を象徴する振興組合とはどのような団体であるのか考えてみたい。まず、日本の高度経済成長を背景として生まれた商店街振興組合法（昭和37年5月17日法律第41号）があるが、それは次のようなことを総則とする法律である。「商店街が形成されている地域において小売業又はサービス業に属する事業その他の事業を営む者等が協同して経済事業を行うとともに当該地域の環境の整備改善を図るための事業を行うのに必要な組織等について定めるところにより、これらの事業者の事業の健全な発展に寄与し、あわせて公共の福祉の増進に資することを目的とする。」この組合法に基づいて設立される団体が振興組合であり、職住分離により住民が流出した商店街において多数生まれている。共同経済事業と環境整備事業を行うとされているが、実際には組合員の福利厚生や後継者育成などの事業から防犯や共同施設の維持管理まで、商店街の日常生活全般に渡る問題を処理している。三宮地区の振興組合の場合にも年度ごとの報告書やパンフレットを見ると、会長または理事長の下に総務、企画、文化厚生、渉外、婦人などの部があり、商店街の多種多様な問題に対処していることが分かる。毎月きちんと理事会を開催しており、経済的利害関心を軸とするだけに少なくとも普通の町内会＝自治会よりも絶えず相互連携を取りながら活発に動いている。恐らく商店主たちは自分の住居がある地域には余り関与していなくとも、お店のあるセンター街には地域社会の一員として深く関わっているものと思う。彼らの間にはかなり頻繁な接触があり、密度の高い社会的ネットワークが形成されている。毎日多数の人が行き交うセンター街は、振興組合の活動と組合員のネットワークがあってこそ成り立っている街と言えよう。

振興組合は法律上様々な恩恵を受ける権利がある反面、厳しい制約と義務もあるために、余り深く関与したくない者には有り難くない団体かもしれない。したがって、もっと気軽に地域

団体を作りたい場合には協同組合ないしは商店会などの任意団体になるだろう。三宮地区の商店街でも、センター街1〜3丁目振興組合を除けば協同組合、商店会、自治会＝町内会などの組織構成を取っているところが多い。それらの状況をまとめれば表1のようになる。繰り返しになるが、注目すべき点は、典型的なビジネス地区であるために普通の住宅街とは異なり住民の町内会＝自治会が少ないのに比べ事業者の団体が大半を占めていることである。現実の機能を調べてみた結果では各種の組合、商店会と町内会は類似している面が多く、前者の団体はかつての町内会の機能を受け継いでいると考えてよい。

以上のような地域団体をベースにして表2に例示された防犯、消防、交通、福祉、産業などに関わる協会や協議会、あるいは連合会が作られ、多種多様な会議やイベントなどが実践されている。逆に、それらの実践を通じて基礎的地域団体が連結され、個々の団体を越える連合組織とパーソナル・ネットワークが形成される。例えば生田防犯協会を取り上げてみると、神戸随一の繁華街があるために犯罪も頻繁に発生しており、当地区の商店街では生田署と協力しながら防犯協会を作り、熱心に防犯活動を行っている。振興組合と商店会の主な役員は大体防犯協会の東支部か西支部の役員も兼ねている。さらに、筆者が聞き取りと資料収集によって得たデータによれば、(三宮)金曜会と呼ばれる非公式の集まりもあり、団体を横断するパーソナル・ネットワークも形成されているようである。表1に示されている組合、商店会、町内会の幹部役員と三宮地区の大企業の役員クラスがメンバーとなっていて、神戸の経済界を指導している人々の集まりのように考えられる。毎月定期的に会合しているために、実質的な効力を持つネットワークが生まれる。さらに、センター街の事業報告書と『月刊センター』を調べてみると、商店街全体の組合と任意団体に関わるような四季折々のセール、クリーン作戦、防犯と交通安全のキャンペーンなどのイベントと行事が定期的実践されていることが分かる。

結局、非公式のものも含め、いろいろな領域の多様な団体が重層的に存立していると同時に、頻度と密度の高いパーソナル・ネットワークが張り巡らされ、多種多様な会議、イベント、行事などが実践されていると推測できるだろう。伝統的な集団論や社会関係論だけではアプローチできない要素も多いから、ネットワーク論の方法と知見を試す格好の場であると考えられる。ただ、多様な団体の重層的構成と濃密なパーソナル・ネットワークの構造の全体を正確に解明することは現在の筆者にはとてもできないので、生田祭の実践に関連する部分だけを取り出してみたい。

3. 三宮地区の祭りの実践方法

昭和40年代の市街地改造事業を境にして、三宮地区は経済地理的にも社会組織的にもかなりの部分が変貌してしまうが、それでは神社の祭りはどうなったのだろうか。一般に、住民が流出し業務地域に純化された場合には民俗的な要素は伝承の担い手を失い、消滅していく。都市民俗なるものが存立しにくい最大の原因は、やはり住民の流出とか絶えざる住民の移動と交替による伝承の担い手の喪失に求められるだろう。三宮地区の場合にも近代化の中で民俗的な要

団体の種類と性格等	団体の名称と会員数
商店街振興組合 ・昭和37年商店街振興組合法による ・加入脱退自由 ・環境整備、経済事業 ・営利と公益の中間 ・行政庁の認可	三宮センター街1丁目振興組合90→1～3丁目振興 同上 2丁目振興組合59 組合の連合会 同上 3丁目振興組合51 (3丁目だけ自治会登録している) 三宮本通商店会振興組合52 (別に1丁目自治会がある) 生田字筋商店街振興組合51
事業協同組合 ・昭和24年中小企業等協同組合法 ・振興組合に準ずる	大丸前中央商店会44 トーアロード商店街東亜会58 (他に昭和32年中小企業団体の組織に関する法律の適用も受ける)
任意団体 ・諸々の組合法により拘束されない ・戦後の憲法、地方自治法等による ・ただ、戦前からの商店会、町内会を受け継ぐ場合もある	さんちか名店会128 サンプラザ名店会80 センタープラザ名店会81 左同 西館名店会30 三宮一番街商店会27 三宮京町筋商店街20 (以上は神戸市商店街連合会に加入している) 三新会 河原町通商店会 (以上は市商連に加入せず、会員数不明) 三宮神社東町町内会(会員数不明) 三宮本通1丁目自治会(会員数不明)

表1 三宮地区の主な基礎的地域団体：概ね平成5年度の地元の商店街と市役所の資料に基づいて作成した。表1の団体は生田祭の実践の基礎となるものに限定されている。

主な連合組織 ↓ 基礎的地域団体間と個人間の幅広いネットワークの基盤となる	三宮センター街連合会 生田防犯協会(東西の支部) 生田交通安全協会 生田地区自治会連絡協議会 生田連合婦人会 ウィンディ三宮 三宮金曜会
主な実践 ↓ 個人と団体の社会的能力の形成=再生産	連合組織の会合 チャリティセール(年数回) クリーン作戦(年数回) 神戸まつり クリスマスセール等のフェア 交通安全・防犯・防火運動

表2 三宮地区の主な連合組織と実践：概ね平成5年度商店街の組合の資料と『月刊センター』に基づいて作成した。

素の消滅の危機にさらされ、現在では既に失われてしまったものも少なくないようであるが、生田神社と三宮神社の例大祭は多少姿を変えながらも今も伝承されている。本稿は生田祭を主な論点としているが、三宮地区に関しては生田祭の実践方法と密接に関連し合っている三宮神社の春季例大祭の実践方法を先に考察したい。

(1) 三宮神社の春季例大祭の実践方法

生田神社は神戸市の中央区と兵庫区のほぼ全体を氏子区域とする大きな神社であり、三宮は生田祭の輪番制を構成する11地区の一つに過ぎない。それに対しセンター街の南にある三宮神社は三宮、元栄海（元町・栄町・海岸通り）、諏訪山地区を氏子区域とする比較的小さな神社（生田神社の裔神八社の一つ）であり、地元の商店街の人々にとっては身近な氏神さんらしい。二重氏子とか、三重氏子とか、さらに神様でも仏様でもご利益があれば何でもお祭りする、参拝するといわれるように、日本では同じ地域に複数の神社やお寺があるのが普通である。三宮の商店街の人々も小さなお社をいくつか持っているかもしれないが、毎年5月10日前後に行われる三宮神社の例大祭には熱心に参加するようである。ここでは論点を限定しているから、神社の歴史と行事の詳しい考察は省略して例大祭の組織と実践の仕方だけを取り上げてみる。

生田祭と同様に三宮神社例大祭も元栄海、三宮（宮本）、諏訪山の3地区の輪番制に則って行われるから、三年に一回奉仕当番が回ってくる。三宮地区は最近では昭和60年、63年、平成3年、6年に奉仕当番になっている。当神社の清水宮司のお話では、三宮は宮本地区（神社のおひざもと）だけに最も熱心に神社と祭りに協力してくれるという。清水宮司から頂いた例大祭の最近の資料を見れば、前号で取り上げた生田祭の岡方地区の組織運営とほとんど同じ「総合委員会－各種委員会方式」に基づいて祭りを実施している。ただ、関係者に対する聞き取りと各種の資料によれば、岡方の委員会は主に町内会＝自治会の役員のパーソナル・ネットワークを軸にして組織化されたのに対して、三宮では振興組合や商店会などの役員のネットワークを通じて委員会が組織化された。平成6年度は、たまたま生田祭と三宮神社例大祭の奉仕当番を三宮地区が同時に引き受けることになり、委員の選出と予算の配分に苦慮したようである。

例年生田神社では4月15日前後、三宮神社では5月10日前後に氏子奉幣祭と神幸式を実施する予定としていたために、平成6年度は三宮商店街において二つの祭礼の委員会がほぼ同時に組織され、準備が進められることになった。ここで予め注意すべき点は、現代では憲法に政教分離の原則があるために一般の地域団体（町内会＝自治会や振興組合など）が祭礼に直接関与することは当事者の間でも禁止ないし抑制されていることである。例えば振興組合の事務所に聞き取りに行った時に、事務局長さんから地区の神社の祭礼の話聞くことも資料を頂くこともできなかった。振興組合は神社の祭りには関わっていないから、言い換えれば理事会や総会にその種の議題が取り上げられたことはないから、全く分からないということであった。要するに、商店街のイベントやセールは組合の仕事だから繰り返し議題になるけれども、神社祭礼については組合の役員が組合とは切り離された場で議論しているのではないかということである。事務局長さんの言葉を裏づけるように、組合の役員の側でも組合に神社祭礼の議事を持ち込むことはしていないようである。だが、そのことから、振興組合などの地域団体が神社祭礼に全く関係がないという結論を引き出してはならない。当事者の禁止と抑制の意図にもかかわらず、地域団体の実践とネットワークが祭礼の組織づくりと実践に重要な基盤を与えているように思われる。

政教分離の原則を三宮地区の商店主たちも守っているということを前提にして考察を進めよ

う。生田祭に関しては後ほど詳しく記述するが、生田神社の神職 H 氏、三宮神社清水宮司、および振興組合の役員（差し障りがあると考えられる場合には匿名にする）の話を総合すると、まず平成 6 年 1 月 14 日に生田神社会館で行われた当商店街の成人式の際にセンター街の役員が出席したので、その折に神社側から祭礼の委員の選出をお願いしたという。成人式終了後、センター街の役員のお店で神社側の代表者と振興組合の代表者が委員の選考作業を行い、当日のうちにほぼ全ての委員を選出したそうである。筆者が頂いた二つの祭りの委員会の名簿を見る限り、祭りの規模が違うために委員会と委員の数には差があるものの、組織の名称と委員の氏名はかなり類似している。一方は規模は大きいが、十一年に一回しか回って来ないのに対して、他方は規模は小さいが、三年に一回当番になるから、明言する者はないが、恐らく後者の経験に基づいて選考作業を行ったのではなかろうか。昭和 46 年と 57 年の生田祭よりも、昭和 63 年と平成 3 年の三宮神社例大祭の経験の方が記憶に新しいし、残っている当事者も多い。三年に一回であれば委員会の組織化の方法と祭りの実践の仕方が経験を通じて繰り返して身体と心の中に刻み込まれ、必要な時に比較的鮮明な記憶として新たに呼び覚ますことができるけれども、十一年に一回しか経験しなければ刻み込む力も弱くなり、また喚起することも難しくなるだろう。そのような意味で、三年ごとの三宮神社例大祭の実践が方法論的基盤となり、十一年に一回の生田祭も比較的スムーズに実践できるようになる。

さて、平成 6 年の初めに組織された三宮地区の祭礼委員会はどのような構成になっているのだろうか。ここでは三宮神社例大祭の委員会を取り上げ、主な特徴を再検討してみよう。まず最初に、委員会と委員の数を列挙すれば以下になる。

総合委員会 8、総合会計 5（以下、委員会という言葉は省略する）、総務 6、猿田彦 4、斎宮 5、子供神輿 8、稚児 6、神受 6、給与 3、行列 5、道筋 8、警備 3、記録 5、広報 3、接遇 6、婦人部不特定数（委員長 1 名、複数の個人と団体単位の委員）、救護不特定数（婦人部と同様）、顧問 9、参与 3、相談役 34

祭りの規模を考えると委員会も委員も多すぎる気がしないではないが、できる限り地区の商店街全体で円滑に祭りを実施するという趣旨からすれば、仕方がないのかもしれない。また、技術的に考えても大都市の繁華街で神幸式をするにはお金も人も必要である。すなわち、商店街のお客さんと車を整理しながら行列を支障なく巡行させるためには、かなりの数の補助的役員を配置しなければならない。三宮のような神戸一の繁華街には観客がたくさんいるから、実施する側では行列も演技もそれ相応に目立つ華美なものに仕上げたいという心意も働くだろう。多数の観客の熱い視線と演技者の風流な芸態の相乗作用を通じて神幸式は盛り上がる。

次に、どのような人が委員になっているのか検討してみたいが、先ほど指摘したように振興組合や商店会などの役員のネットワークと過去の経験がベースにあると思われるので、各委員長の所属団体とそこでの地位、および祭礼委員の経験の関連を調べてみた。その結果をまとめると表 3 のようになる。ほとんどの委員長が振興組合や商店会の何らかの役に就いており、しかも 1 丁目振興組合から大丸前中央商店会まで幅広い地域団体から委員長が選ばれている。センター街だけでなく三宮の商店街全体で祭りを引き受けようという姿勢が読み取れる。さらに

祭礼委員会	各種委員長の所属団体とその役職	前回の委員経験
総合委員会のメンバー	センター街1丁目理事長、2丁目理事、3丁目会長、3丁目副理事長	ほぼ全員が前回同様の委員
総合会計委員長	トーアロード東亜会理事長	総務委員長
総務委員長	大丸前中央商店会長	道筋委員
猿田彦委員長	大丸前中央商店会所属	総務委員
斎宮委員長	センター街3丁目副理事長	猿田彦委員
子供神輿委員長	サンブラザ名店会所属	前回と同じ
稚児委員長	センター街2丁目副理事長	総務委員
神受委員長	センター街2丁目副理事長	前回と同じ
給与委員長	大丸前中央商店会副会長	広報委員
行列委員長	大丸前中央商店会副会長	前回と同じ
道筋委員長	三新会会長	前回と同じ
警備委員長	三宮本通商店街副会長	前回と同じ
記録委員長	センター街1丁目会計部長	参与
広報委員長	三宮本通1丁目自治会長	前回と同じ
接遇委員長	三宮本通商店街理事長	前回と同じ
婦人部委員長	女性（センター街3丁目）	前回と同じ
救護委員長	女性（三宮町1丁目）	前回と同じ

表3 平成6年度三宮神社春季例大祭総合委員と各種委員長の所属団体：
三宮神社清水宮司から頂いた資料等に基づいて作成した。三宮地区
が前回奉仕当番になったのは平成3年度である。表に挙げなかった
名誉職的委員として参与、顧問、相談役がある。

ほとんどの委員が前回の委員の経験者であり、民俗ないしは実践方法、いわゆるエスノメソドロジーの伝承性が伺える。

委員会の組織構成のその他の特徴については生田祭との関連から後ほど取り上げることにして、三宮神社例大祭の神事と祭事の構成の要点だけまとめておく。宮司のお話では、約十五年前までは5月12～13日に神事＝氏子奉幣祭と祭事＝神幸式を行っていたけれども、地元の子供の減少と学校や企業の都合により慣例通りの日に実施することが不可能になった。そのため、5月10日前後の吉日に奉仕当番地区の都合の良い日程で祭りをするようになった。現在の宮本地区の神幸式は役員と子供中心の行列が小さな神輿や斎宮を伴って、三宮神社→大丸前→三宮本通り→センター街→三宮神社というコースを巡行する形で実施されている。地元に住民がほとんどいないから、青年たちが担ぐような大人神輿は出せなくなり、役員に縁のある子供と母親を主体とする神幸に変えたという。別に無理をしてまで古き良き日本の伝統を守って欲しいという主張をするつもりはないが、神戸まつり、クリスマスセール、さらにアーバンリゾートフェアなどの行政主導と企業主導のイベントばかりが増えては味気ない。その類いのイベントはいずれも効率的都市経営を象徴する儀式であり、近代合理主義の一面を強調するものであろう。集客力のある面白い都市を造ることは差し支えないけれども、人と物ばかりがあふれる過密な都市にはしてはならない。

(2) 生田祭の実践方法

三宮神社例大祭の三年に一度の実践（特に昭和63年と平成3年のケース）を基礎にして平成

6年度の生田祭が実施された。ここでは最初に、準備段階から祭りの終了まで実践の過程の要点を取り出していこう。

既述の通り関係者の聞き取りによれば、生田祭については神社祭礼であるために振興組合や商店会の会議の場で議題として取り上げられるわけではなく、役員が個人の意志で「地域団体の外で」関わる。たまたま成人式が神社会館で実施された折に、組合の役員と神社の代表者が祭りの委員の選出について話し合うことになった。年初めに生田神社と商店街の代表者がそのような形で接触し、以前の資料と経験に基づいて委員の選考を進め、数時間で終了した。祭りの半年前位から委員の選出が始まる生田祭の慣例からすれば、少しスタートが遅い。それは、平成6年度は三宮地区が二つの祭り（4月と5月の一ヶ月の間に行われる）を同時に引き受けるために、慎重になっていたことも理由の一つのようである。しかし、委員の選出が終わってからは、ほぼ順調に委員会の活動が進んだそうである。選考作業の内部事情に関しては、匿名にしたり省略しなければならない要素もある。誤解されやすい表現になるかもしれないが、生田神社では生田祭の奉仕当番地区にそれぞれ「専任の神職」を割り振り、祭りに必要な情報を的確に把握して費用と人員を確保しようとしている。平成5年度奉仕当番の岡方地区担当の神職はK氏であったが、三宮地区担当はH氏であり、担当地区の事情を的確に把握していた。例えば三宮地区では誰がどのような仕事（お店）をしているか、どの団体の役員をしているか、団体を横断するようなパーソナル・ネットワークがあるのか、誰が祭りの経験者であるのかについてH氏は実に手際よく説明してくれた。そのH氏から選考を依頼されたS氏は、当地区では最も影響力のある人物であり、長年センター街振興組合の役員を務めており、また三宮神社例大祭と生田祭の重要な委員を何回も経験していた。S氏は2丁目組合の理事会、センター街1〜3丁目連合会、および金曜会と呼ばれる地区全体の非公式の会合を通じて絶えず商店街の多くの店主たちと接触していたために、非常に幅広いパーソナル・ネットワークを持っている。さらに祭りの委員を繰り返し経験してきたから、祭りの組織づくりと行事のやり方についても精通している。図1に示したように、生田祭の実践方法と地元のネットワークを熟知している神職と氏子代表が共同で選考作業すれば、三時間程で全ての委員を選出できるのも当然かもしれない。

選考が終わり次第、当事者に連絡し了解を得てから、1月下旬に総合委員会を開催し、本格的な準備段階に入った。それでは、どのような委員会ができたのだろうか。ここで委員会名と委員の数を列挙しておこう。

総合委員会15、総務11（以下、委員会は省略する）、会計7、神輿18、四方綱11、女子神輿9、子供神輿11、獅子頭9、梶原武者10、行列道筋11、給与9、神受10、神賑5、接遇11、警備5、御先太鼓5、広報5、記録5、救護4、稚児16、婦人部12

三宮神社例大祭の委員会とよく似ているけれども、異なる部分もある。神幸の出し物や参加者に関しては、やはり生田祭の方が種類も人数も多いから、委員会の種類も多くなる。例えば三宮神社では随分前から大きな神輿は出さなくなっているが、生田祭では地元の会社や商店にお願いしてでも大きな神輿を必ず神幸のメインにしている。大きな神社が神幸にそれ相応の神

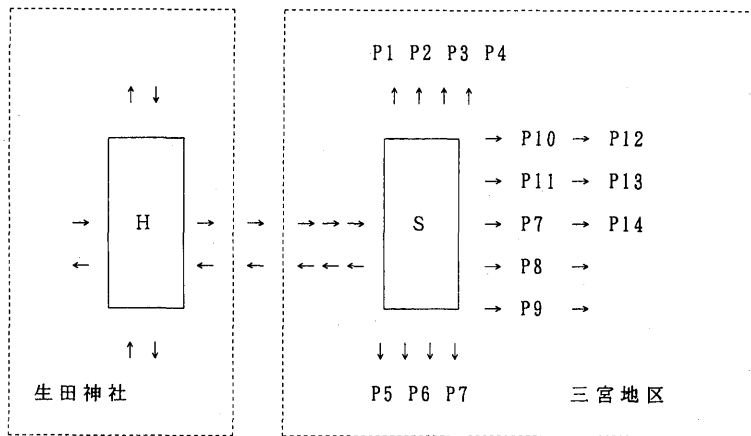


図1 生田祭委員会の構成過程：Pは個人を表す。神社と商店街という異なる場を結ぶ点は、H氏とS氏であり、彼らは委員会の構成過程の始めでは二つの場のネットワークの中心に位置する。S氏は表2の連合組織の役員を兼任して、最も幅広いパーソナルネットワークを保持する。

興を出さなければ、神幸の意味がなくなってしまう。また、大きな神興にはそれにふさわしい賑わしの出し物が必要であり、獅子、太鼓、武者、何台もの賑わしの神興などが神幸に加わるようになる。結局、祭りがうまくいくかどうかは、神幸の行列が充実した内容を備えていること、並びに巡行が想定した通りのコースと演技に則って実施されることに依存しているから、神幸には多くの委員と費用が必要である。

生田祭の場合には輪番制に則って毎年異なる地区が祭礼を実施するから、当番地区の特色が表れる。平成5年度当番の岡方の場合には委員は町内会＝自治会のネットワークを中心に選出され、各町ごとのバランスを考えた構成になっていたが、三宮地区の場合には振興組合や商店会のネットワークが基礎になっていると考えられる。そこで、総合委員と各種委員長の所属団体、役職名、並びに生田祭委員の経験の有無の関連を検討してみよう。表4を見ると、センター街の三つの振興組合を軸にして地区全体の商店街から総合委員と各種委員長が選ばれている。会長、理事長、副会長、副理事長、理事などの要職にある者が大半を占めているが、多数の商店街が共同で祭りを引き受け、短期間の内に必要な人員、資金、物を揃えるためにはリーダーたちが率先して祭礼委員長にならなければならない。リーダーたちは商店街の役員活動で日頃から接触しているから、祭りの時にも協力しやすい。恐らく全ての総合委員と各種委員長は、金曜会などの非公式の会合で定期的に接触しているのではなからうか。

表4では委員長クラスだけを取り出してみたが、それぞれの委員会には大体10名前後の委員がいる。煩雑になるので委員全体についてもクロス表を作ることは差し控えたい。聞き取りの際に収集した委員会名簿などを調べると、各委員長の下には委員長に協力しやすい者が委員に選ばれている。委員長クラスの選出に見られた商店街のバランスではなく、委員長との親和性

祭礼委員会	各種委員長の所属団体とその役職	前回の委員経験
総合委員会 →	センター街連合会長、1～3丁目理事長、京町筋商店街会長、センプラ西館名店会長、元理事長・会長	15名の総合委員のうち11名が経験者である
総務委員長 →	三宮1番街商店会所属	なし
会計委員長 →	サンプラザ名店会会長	相談役
神輿委員長 →	センター街2丁目副者事長	神輿委員
四方綱委員長 →	センター街1丁目会計部長	総合委員
女子神輿委員長 →	サンプラザ名店会	子供神輿委員
子供神輿委員長 →	センター街3丁目副理事長	なし
獅子頭委員長 →	センター街2丁事	給与委員
梶原武者委員長 →	トーアロバド商店街東亜会理事長	なし
道筋行列委員長 →	センター街2丁目理事	女子神輿委員
給与委員長 →	センター街2丁目副理事長	なし
神受委員長 →	センター街1丁目理事	なし
神賑委員長 →	大丸前中央商店会所属	神賑委前回と同じ
接遇委員長 →	大丸前中央商店会副会長	なし
警備委員長 →	三宮本通商店街副会長	なし
御先太鼓委員長 →	センター街2丁目所属	なし
広報委員長 →	大丸前中央商店会会長	神受委員
記録委員長 →	三宮一番街会長	なし
救護委員長 →	センタープラザ名店会会長	獅子頭委員
稚児委員長 →	女性（センター街1丁目）	なし
婦人部委員長 →	女性（センター街3丁目）	婦人部委員

表4 平成6年度生田祭総合委員と各種委員長の所属団体：生田神社と地元商店街の祭礼資料と聞き取りに基づいて作成した。三宮地区が前回生田祭の奉仕当番になったのは昭和57年度である。

を基準に委員会が構成されていると言えよう。祭りに必要な人員や資源を実際に集めるのは各委員会の仕事であるから、お互いに活動しやすい組織になっていなければならない。その辺りの事情も予想してS氏とH氏は全ての委員の選考を進めたそうである。祭りの後で何人かの委員に話を聞いた時にも、Sさんはうまいこと人を組み合わせていると感心していた。やはり、いろいろな場での日頃の実践を通じて得られた情報とネットワークが祭礼の場にも活用される。しかも、委員を選ぶ側だけに偏った情報とネットワークでは不十分であり、選ばれる側にもある程度共有されている情報とネットワークを基礎にして組織構成は行われなければならない。S氏とH氏の選考作業はそのことを証明するものであり、ほとんど異議が出なかったこともうなずける。

ところで、三宮神社例大祭は三年サイクルの輪番制で実施されているために、ほぼ全員が前回の委員経験者だった。生田祭の場合はどうだろうか。表4に見られるように、総合委員に関しては前回昭和57年の時も委員をしていた者がかなりいる（8割近い）のに比べ、各種委員長の約半数は委員をしていなかった。総合委員会は各種委員を経験して最後にたどり着く上位のリーダーシップと名誉職を兼ねた機能を持つものに対して、各種委員会は個々の具体的活動に関わるために、それぞれの分野に合う中堅どころが配置される。恐らく、生田祭の委員は三年サイ

クルの例大祭の委員を経験しているはずであり、同じ地域にある神社の類似した祭りの実践には特に支障はなかったと言えよう。それにしても、現代のように社会の変化が激しい時代では十一年という時間は人の職業や住居、さらに生活全体を変えてしまうように思われる。自営業者の多い商店街のように定着率の高い場でも、三宮のように大型店舗や大企業がしのぎを削る大都市のビジネス地区では商店の入れ替わりも少なからずあり、十一年サイクルよりも三年サイクルの方が時間の目安が立てやすい。

平成6年度は二つの祭りを三宮地区が引き受けたが、時期がほぼ重なってしまったために委員の配置に苦労したのではなかろうか。二つの祭りの委員会の顔ぶれを調べてみると、表5のように対応している部分と交差している部分が適当に混じり合っているように見受けられる。三宮神社例大祭の委員は三年前と同じ、つまり前回同様が多いから、三年ごとに委員を少しずつ更新していくパターンになっていると言えよう。輪番の時間の長さ故に前回同様にはならなかった生田祭の委員の配置に苦労したものと推察される。三年サイクルの例大祭の委員会名簿と十一年前の生田祭の名簿を共に参考にして委員を配置したのではなかろうか。

生田祭の委員長	三宮神社例大祭での委員
総合委員会の委員	→総合委員、顧問、参与 相談役
総務委員長	→総合委員
会計委員長	→相談役
神輿委員長	→神受委員長
四方綱委員長	→記録委員長
女子神輿委員長	→子供神輿委員長
子供神輿委員長	→総合委員
獅子頭委員長	→委員ではない
梶原武者委員長	→総合会計委員長
行列道筋委員長	→子供神輿委員
給与委員長	→稚児委員長
神受委員長	→斎宮委員
神賑委員長	→猿田彦委員長
接遇委員長	→給与委員長
警備委員長	→警備委員長
御先太鼓委員長	→委員ではない
広報委員長	→総務委員長
記録委員長	→委員ではない
救護委員長	→総合会計委員長
稚児委員長	→子供神輿・稚児委員
婦人部委員長	→婦人部委員長

表5 平成6年度生田祭委員と三宮神社例大祭委員との関連：祭礼委員名簿等に基づいて作成した。生田祭委員会と委員の方が当然種類も数も多い。

委員会の体制が確立されて以後は1月から4月まで各委員会ごとに準備を進め、それを総合委員会で確認しながら、祭りの一週間前には準備がほぼ完了した。個々の準備の経過を詳しく記述することは差し控えるが、1月25日、1月31日、3月8日、4月4日という日程で生田神社会館にて総合委員会が開催された。平成5年度の岡方地区と同様に各委員長から準備の現況が報告され、それに関する問題点が論議され、再度各委員会ごとに不足や遅れを補っていく活動が繰り返された。商店街の人々は人員、お金、物を調達することに関しては日頃から慣れ親しんでいるので、祭りに必要な資源を調達する作業も余り苦にならない。約三ヶ月間の準備の後、4月15日の氏子奉幣祭と神幸式を迎えることになる。生田祭には、祭り当日まで当番地区が「物忌み精進する」慣習はないために商店街も通常通り営業されている。大都市の商業の中枢にあるから、祭りのために店を閉めることは許されない。ほとんどの従業員にとっては生田祭の本番の日も普通の日であるのに対して、委員と参加者にとってはハレの日である。とりわけ祭りの衣装に着替えて神社の境内に入ると気が引き締まると同時に、うきうきするという。筆者は学生とともに神事と神幸に参加したが、特に天候も良かったこともあり、なんとも言えない厳肅さと晴れがましさを感じた。昨年度に劣らず今年度の生田祭も素晴らしいものだったように思う。主たる論点が神道と歴史ではなく社会学的要素にあるため、神事の式次第と神幸のコースについては本文の後に掲載することにして、祭礼の内容に関する考察は省略する。

さて、無事に終了した後で軽率に取り上げるのは好ましくないけれども、三宮地区の商店街にとって生田祭とは何なんだろうか。事前に聞き取りをしたり資料を集めたりした時にも、また祭りに加わって一緒に行動した時にも、そのような質問を正面から聞いたことはなかった。恐らく、祭礼に関わった委員それぞれが違う回答をするかもしれない、あるいはほぼ共通の答えを出すかもしれない。商店街の活性化のためにイベントのつもりで祭礼をする、神様のご利益を得るために神幸式をするという考え方もある。宗教学、民俗学、社会学の仮説を使って可能な答えをあれこれ想定することもできる。例えば論文の冒頭で述べたように、生田祭は商店街のリーダーたちの祝祭であり、またリーダーシップの象徴化の儀礼でもあり、祭りの実践を通じて当地区の組織とネットワークが再生産されるという仮説も成り立つ。そのような言葉を明言する委員はいなかったけれども、委員の選出過程と所属団体における地位、および神事と祭事の雰囲気を見ればその仮説を否定することはできない。元来日本の祭礼には宮座と呼ばれる特権的団体があり、神事と祭事を取り仕切ると同時に、宮座のメンバーが世俗の政治と経済においてもリーダーシップを握っていた。生田神社には宮座が存在せず、しかも政教分離の原則が遵守されているために、聖と俗のリーダーシップの構成と関連は分かりにくいとは言え、本論の表を見れば宮座型の構図を読み取ることができる。ただし、そこから差別と排除の戦略＝体制を明らかにしていくという作業を展開するつもりはない。もしそのような試みをするつもりならば、当事者たちの会話、身体活動、あるいはカテゴリー表現に焦点を置いて粘り強い資料収集と緻密な解釈を続けなければならない。

その他にもいろいろな学問上の仮説が考えられるけれども、突き詰めていけば、生活の中から生まれる不安に根ざした宗教心が祭りを支えているようにも思える。筆者が以前社会調査し

た四国香川県の仁尾町と引田町は、近世の瀬戸内海航路で栄えた港町であり、また古代からの漁業の街でもある。その地の祭礼は、漁業と交易の港に生きる人々に固有の宗教心を表現しているように見えた。死と背中合わせの仕事をしている漁民には神様に対する鋭い感受性が備わっていて、それが威勢がよく厳粛でもある祭りを生み出すのだろう。漁民程ではないが、港の交易と商売に携わる人々もかなりのリスク（危険）を背負って仕事をしているせいか、漁民に近い宗教的感覚を内に秘めているように感じられる。そのような延長線上に現代の港湾都市の商店街の人々が存在するのではなかろうか。生田祭と三宮神社例大祭を今もなお伝承している根底には、港が醸し出す独特の宗教的雰囲気があるのかもしれない。今回の阪神大震災は現代都市のリスクの高さを象徴する社会的災害でもあり、港湾都市の民衆に潜在している宗教的感覚を強めるだろう。そのような感覚が新しい防災都市づくりのバネになれば幸いである。自然の威力を忘れ、効率的な開発だけを続ける人間には都市を造る資格はない。

[本稿は神戸女学院大学研究所1994年度研究助成金による研究成果である]

(補足) 平成6年度生田祭の主な日程と神幸式徒歩行列巡幸図を掲載しておく。

4月15日(金)

午前8時30分、三宮神社にて当番地区の委員、神社と祭礼の関係者は身支度する。9時30分頃、生田筋を徒歩で生田神社に向かう。午前10時、生田神社本殿と拝殿にて氏子奉告(幣)祭を実施する。終了後(午前11時30分頃)、生田神社会館にて直会を行う。午後1時、発輿式を実施し、神幸に出発する。巡幸のコースに設けられた以下の神受所にてミニ儀式を行いながら、午後5時頃、生田神社に戻る。サンブラザ南入口前(三宮町1丁目)→輸入品店「ミッチャン」(2丁目)→お店「赤のれん」(3丁目)→セリザワ本社(3丁目)→ナガサワ文具店(1丁目)→「みどり美粧院」(北長狭通1丁目)、以上が神受所。なお、神幸式の間(午後2～3時)に生田神社拝殿にて伊勢神宮舞楽の奉納が行われる。巡幸の行列は午後5時頃生田神社に戻り、境内にて子供神輿、女子神輿、大人神輿(神社神輿)の順に賑わしの演舞をする。拝殿にて還御式を行い、午後6頃には神幸式は無事に終わる。行列の構成：広報車、のぼり、高張提灯、御先太鼓(10名)、先導神職、猿田彦神役(20名)、獅子頭(20名)、梶原武者(10名)、子供神輿(数基・諏訪山小児童他50～100名)、稚児(50名)、女子神輿(1基・地元の女子大生他60名)、大人神輿(1基・関西電力社員他60～100名)、宮司、神職(数名)、巫女(数名)、祭礼委員他(30名)

4月16日(土)

午前10時30分、当番地区以外の以下の神受所の巡拝に出発する。葺合(上組・中央区浜辺通4丁目)→元栄海(三越し前・元町通3丁目)→東山(東山公民館・兵庫区東山町2丁目)→兵庫北部(有馬芳香堂・下沢通7丁目)→生田神社御旅所(大開通)→兵庫中部(蓮池氏宅・塚本通5丁目)→兵庫南部(大西氏宅・須佐野通3丁目)→兵庫岡方(猿田彦神役杉田氏宅・駅南通3丁目)→兵庫岡方(高田総代宅・湊町2丁目)→下山手(生田神社分社・中央区中山手通8丁目)→諏訪山(近石ビル・下山手通4丁目)、以上。小さな神輿を自動車に乗せて回り、神職、巫女、梶原武者等が各神受所にてミニ神事を行う。午後4時頃に生田神社に戻る。

主な参考文献

- ・大和田貞策編『生田神社誌』(生田神社社務所, 大正十一年)
- ・福田義文編『生田神社史—後神家文書』(上)(中)(下)(生田神社社務所, 昭和55~63年)
- ・加藤隆久編『生田神社—神道史研究—』(生田神社社務所, 昭和48年)
- ・三宮神社奉賛会『三宮神社略誌』(三宮神社社務所)
- ・野中春水編『河原霊社』(河原霊社奉賛会, 昭和47年)
- ・神戸市教育委員会『神戸の民俗芸能—灘・葦合・生田編—』(神戸市教育委員会, 昭和51年)
- ・神戸市中央区役所『生田区のあゆみ』(神戸市中央区役所, 昭和57年)
- ・小林正信『あれこれと三宮』(三宮ブックス, 昭和61年)
- ・熱田公他編『兵庫県地名大辞典』(角川書店, 昭和63年)
- ・三宮センター街連合会『三宮センター街三十年史』(大和出版, 昭和53年)
- ・神戸市商店街連合会『神戸市商店街連合会20周年史』(神戸市商店街連合会, 昭和46年)
- ・同『神戸市商店街連合会30周年史』(神戸市商店街連合会, 昭和56年)
- ・十周年記念実行委員会『三宮第一協同組合十年誌』(昭和54年)
- ・十五周年記念実行委員会『三宮第一協同組合十五年誌』(昭和60年)
- ・神戸市経済局中小企業指導センター『三宮センター街1・2丁目商店街診断報告書』(平成6年)
- ・神戸市経済局中小企業指導センター『三宮センター街3丁目商店街診断報告書』(平成6年)
- ・『センター』(月刊センター編集室, 昭和30年代から平成6年まで)
- ・神戸市経済局『神戸の小売商業』(神戸市役所, 昭和60年)
- ・三宮センター街1丁目商店街振興組合『第23回通常総会事業報告書』(平成5年)
- ・同 2丁目商店街振興組合『第21回通常総会事業報告書』(平成6年)
- ・同 3丁目商店街振興組合『第19回通常総会事業報告書』(平成6年)
- ・神戸市経済局商業貿易課『商店街・小売市場のための支援策ガイド』(平成6年)・『神戸市町別世帯数・人口』あるいは『神戸市町別世帯数・年齢別人口』(昭和30年から平成2年までの国勢調査結果)(神戸市役所)
- ・神戸市市民局『平成5年度住民自治組織実態調査報告書(神戸市の自治会・町内会)』(神戸市市民局市民文化課, 平成6年)
- ・Helen Hardacre, *Shinto and the State: 1868–1988*, Princeton University Press, 1989.
- ・黒田日出男他編『行列と見世物：歴史を読みなおす17』(朝日新聞社, 1994年)
- ・長谷川晴男編『神社祭祀関係法令規定累纂』(国書刊行会, 昭和61年)
- ・蓮見音彦他編『都市政策と地域形成』(東京大学出版会, 1990年)
- ・都市計画教育研究会編『都市計画教科書』(彰国社, 1987年)
- ・五十嵐敬喜『都市法—現代行政法学全集16』(ぎょうせい, 昭和62)
- ・松原宏『不動産資本と都市開発』(ミネルヴァ書房, 1988年)
- ・富田和暁『経済立地の理論と実際』(大明堂, 1991年)
- ・黒田彰三『都市と経済立地』(大明堂, 平成3年)
- ・ピエール・ブルデュー『構造と実践』(石崎晴己訳, 新評論, 1988年)
- ・同『実践感覚 I』(今村仁司訳, みすず書房, 1988年)
- ・加藤晴久編『ピエール・ブルデュー：超領域の人間学』(藤原書店, 1990年)
- ・G.サーサス他『日常性の解剖学—知と会話—』(北澤裕他訳, マルジュ社, 1989年)
- ・ハロルド・ガーフィンケル他『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』(せりか書房, 1987年)
- ・H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall, 1987.
- ・ゲオルグ・ジンメル『社会学』(上・下巻)(居安正訳, 白水社, 1994年)
- ・J.C. ミッチェル編『社会的ネットワーク』(三雲正博他訳, 国文社, 1983年)
- ・平松閏編『社会ネットワーク』(福村出版, 1990年)
- ・ジェレミー・ボワセベン『友達の友達』(岩上真珠他訳, 未来社, 1986年)

